

令和2年度 史跡古津八幡山遺跡保存活用計画等推進委員会（通算第6回）・

古津八幡山遺跡確認調査指導部会（通算第9回） 委員意見

日 時 令和3年3月

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、会場での開催は中止とし、郵便・メールにより報告・意見聴取を行うことで委員会の開催に代えた。

委員

小林達雄委員・石川日出志委員・橋本博文委員・菊地芳朗委員・石黒立人委員・川上真紀子委員・齋藤純子委員・朱雁委員・高橋郁子委員・稲葉康宣委員・川内美樹子委員

指導・オブザーバー

新潟県教育庁文化行政課 渡邊裕之氏
新潟県埋蔵文化財センター調査課長 滝沢規朗氏

当日次第（●：委員 ○オブザーバー）

(1) 保存・管理関係

A. 2020年度 古津八幡山遺跡確認調査の報告

- 大形建物の解釈など、妥当とみなす。
- 2020年度の発掘調査で、大型竪穴建物・竪穴建物の構造の全容を把握できたことは、従前の掘立柱建物とともに、この地区の性格だけでなく、古津八幡山遺跡全体の集落構造を理解する上でとても重要な成果であると考え。入念な調査に敬意を表したい。
- SI1とSI465の柱穴の深さが書かれていない。柱穴とみて間違いない深さであるか否かを確認したい。
- おそらく誤植であると思うが、SI465の方が新しいはずなのに「SI1がSI465を壊している」と書かれている（2ページ）。この点を確認したい。
- SD616をSI465の排水溝と判断しているが、平面図（7ページ）をみるとSI1の壁溝SD185とも接続しているようでもある。SI1の排水溝である可能性はあり得ないのか？
- 尾根北側の4T-2と4T-3の間に東西方向の谷があるとされるが、これが人為的な溝の可能性はないのか？
- コロナ禍で大変だったことと思うが、順調に発掘調査が実施され、多大な成果を挙げられていることに敬意を表す。調査成果の公開等についても、毎年着実に実施されており、新潟県内のモデルケースになっていると考える。

B. 2021年度 古津八幡山遺跡確認調査の計画

- 2021年度の調査計画については、上記遺構群地区の理解にも資する意味があり、適切だと考える。
- 2021年度の確認調査に期待する。溝の性格も拡張トレンチで把握できると良いと思う。弥生後期から終末のムラのあり方を示す良い資料になるであろう。南北の長いトレンチによって、ムラの広がり、ムラづくりのあり方など、多くのことがわかるであろう。
- 2021年度調査区について、4T-1、4T-2西側への追加分については、さらに両調査区をつなぐ南北トレンチも欲しい。また、北部に設けられるトレンチについては、直交十字ではなく、斜交十字にして、平坦面をカバーするのが良いのでは。
- 計画に賛成する。
- 令和3年度は、5か年計画の最終年とのことなので、必ず文化庁調査官から現地指導をしても

らった方が良いと思う。

○精緻な調査の実施に敬意を表す。

○建物遺構の名称については、その性格が不明であることから「大形竪穴住居」を「竪穴建物」に変更したことは賛成だが、SI465 は依然として「竪穴住居」が使用されている。この文脈では、SI465 のみ「住居」であることが確定されている印象を受けてしまうが、それで問題ないか。SI1 と同様、全て住居を「建物」に変更した方が誤解をまねかないと思うがいかがか。なお、ここでは「形」が大きいのではなく規模が大きいことを意図しているので、「大形」ではなく「大型」がふさわしい。

例：「亀甲型」×、「亀甲形」○、「小形」×「小型」○。

○SI1 の調査について、すでに指摘があるとおり、排水溝を持つ竪穴建物は西日本に多く類例があるものだが、鍛冶工房との関連が想定される事例がある。村上恭通先生のご教示によれば、地床炉から鍛造に伴う微細な鉄片が出土する事例が近年注目されているものの、フルイでは見つけれない場合があるらしい。そのため金属探知機の活用を推奨されている。簡易な機材があるとの事。今更遅いかも知れないが、もし地床炉とその周辺の土壌サンプルがあれば金属探査の実施をぜひ検討していただきたい。

C. 2021 年度以降の計画

●基本的には賛成。

●平野と反対側に弥生時代の遺構が比較的濃密に存在するのが確認されたことは、この遺跡の評価を大きく左右する重要な成果。一方、遺跡の北側と北西側にも平坦地が延びているのが気になる。この部分の調査を行うことで、より遺跡の性格等が解明される可能性があり、調査の検討をお願いしたい。

(2) 整備関係

A. 大雪による復元竪穴住居の被害についての報告

B. 被害の要因について

●積雪による復元竪穴建物の損傷が発生したことには、相応の驚きを感じた。しかしながら、例年より多い降積雪からすれば想定外でとまでは言えず、多雪地帯の建物復元はどのような措置が必要なのかを考える材料・資料としたい。その点で、直ちに現況および原因調査・記録を行い、降雪地帯の事例調査を迅速に進めたことを評価したい。

●今年は例年に比べ豪雪で大変だったと思う。保存に加え整備もお疲れ様でした。新潟は昔から豪雪地だったと思うので、被害の様子も多いに発信して欲しい。

○大雪による竪穴建物の被害は大変残念に思う。一方、これをきちんと報道に公開するなどの対応に敬意を表す。是非、今回の出来事は記録写真等を十分にとっていただき、分析することで、当時の建物の強度を考える一助にしていただければと思う。

C. 今後の方針について

●そもそも柱穴が浅いことが耐久性の面での構造的弱点であり、当時であれば居住しながら逐次状況判断して様々な対応措置をとって損傷を極力回避するよう試みているはずである。復元建物では当時のような対応は困難であることから、支柱等の強度を増す措置が必須である。また、今回の事例は、史跡整備を行っている自治体にとっても重要な関心事であることから、損傷に関する情報と対応措置等について、積極的に情報発信して、情報共有することが望ましいと考える。

●事務局の案が良いと思うが、必要以上の強度を保つために不自然な復元はやめた方が良いと感じる。今後も大雪の可能性はあるが、その都度復元しても良いと思う。はじめから大雪に備え、見た目が不自然にならないようにして欲しい。

- 予想以上に早い劣化であると思う。今回のような大雪は弥生時代にもあったであろうから、当時も様々な工夫がされていたはずである。柱の太さが調査に基づくものであるなら、上屋を軽くするなどの工夫や、屋根と地面を切り離して雪の圧力を軽減するなどの方法も考えてみる必要があると思う。
- 経費と耐久年数のバランスはあると思うが、できるだけ当時の工法での再整備を望む。
- 劣化の程度の調査が必要だと思う。細かなデータがとれると、整備にも、考古学的資料としても活用できるであろう。また、ボランティアでそのような調査ができるとおもしろいと思う、堅穴内の温度の定点定時観測などができると役立つ資料になりそう。
- 古津八幡山の堅穴は生活実感がある。この雰囲気は維持したい。
- 今後も自然災害や経年劣化はありうることなので、事務局案に示された通り、現存以上の強度を持つ復元整備を期待します。それには、市民の何%の人達が復元堅穴住居の存在を知り、八幡山へ登ったのか、また市内の何%の学校が復元堅穴住居の体験学習を選択したのか、その経験は児童・生徒の学びにどの様なつながりで活かされたのか等の検証が必要だと思う。将来を視野に入れた活用と費用のバランスを考慮した上で判断頂きたい。
- 強度を増す工法での復元が必要と思う。
- 今後の方針として示された案で異論はないが、今後の活用を想定した場合、復元整備ではあるが、ある程度（見えなければなお良い）強度を高めるため、自然木以外の使用はやむを得ない考える。
- 今回の毀損は、一方からの大雪の加重が原因である。主柱の補強にあたっては、基礎部分を強くするだけでなく、主柱間にH鋼の梁を渡して横方向からの力に耐えるような工夫が必要ではないか。当然ながら、見学者に現代工法が見えないことに留意する必要がある。いずれにしる、他県等の参考事例の情報収集に努めていただきたい。

(3) 活用関係

A. 2020（令和2）年度の活用関係の報告

B. 2021（令和3）年度の活用関係について

- コロナ禍による2020年度の入館者数の減少は、ある意味当然であるが、入館者数データ（月別数とその推移）が例年と相当に異なる点をどのように見るかは検討しておく価値があるう。
- 2020年度は、6～8月の約2400～3200人という数は、2016～18年度の6～8月約2400～4000人に比べると減少は意外に少なく、かなり健闘しているとみてよいのではないかと。しかも4月から、緩やかだがおおむね順調に増加しているのも注目したい。全体にコロナ禍の影響が大きいものの、特に大きいのは新津美術館特別展期間中の伸びが例年よりかなり下回った点であろう。
- コロナ禍での今年度実績は、それでも展示館（および史跡）利用が定着しているという判断の材料になるのではないかと。過大評価は禁物だとしても、冷静な評価はあるべきだと考える。
- 2回の展示会関連講演会に参加（担当）したが、丁寧なコロナ対策のもとに、参加された方々の熱心さ、喜びを感じている様子を肌で感じられた。リピーターも多く、講演会が定着しているのだなあと感じた。次年度にも期待したい。
- 地元の金津小・金津中へはどんどん案内して欲しい。小・中学生が足を運ぶことが今後の保存につながる。総合的な学習の時間など、学校の授業でできることの提案などがあると活用しやすい。
- 来年度は感染対策を講じながら、できるだけイベントや企画展を実施してほしい。
- コロナの影響で利用者が減少することは仕方がない。ただ、屋外の遺跡とともに利用できる点を生かしてみてもと思う。今、子どもたちの体験が異常に減少している。何もかもリモー

トになり、実物を見ることや実体験をするなどの機会が失われている。長期化するにつれ、子どもたちへの影響はボディーブローのように広がっている。この解決策の一つとして、弥生館と屋外とをつなげた体験案を作ってみたらどうか。小学校を受け入れるときは、人数を制限して屋外活動を増やすなどの対策をして、小学校に提案してみてもどうか。先生方も安心が確保されるなら、子どもたちを外へ出したいと思っているかもしれない。

- コロナ禍の中、イベント・企画展・関連講演会等の年間スケジュールが提示されることは、たとえそれが延期や中止になったとしても市民にとって足を運ぶきっかけや励みになる。
- 今年度の天王山式土器展は学術的にも重要な展示であり、関係者に敬意を表したい。一方で、展示図録が作成されなかったのはたいへん残念。展示は終了してしまえば何も残らない一方、記録や成果として長く残る図録の存在が大きく、チラシやパンフではその役目は果たせない。毎回図録を準備するのはたいへんであろうが、特別展に際しての図録の作成を強く望みたい。予算的に難しい場合は、解説パネル・写真をPDF化して文化財センターHPに掲載するという方法もあるが、やはり冊子体の方が図書館にも入れられるし、望ましいことは間違いない。なお、福島県文化財センター白河館「まほろん」のように、図録類を「全国遺跡報告総覧」にアップすることも検討していただきたい。
- コロナウイルス問題で来年度の活動も大変だと思うがぜひ頑張って下さい。
- アンギンは興味あります！可能ならばSNSで発信して頂けると気づきやすく、人気になると思う。
- コロナ禍の中で十二分に活用を実施されていると思う。1月の大雪も影響が少なくないと思われる。
- 来年度、まいぶん祭り（春）は中止となったが、周辺施設と連携した試みが大切だと痛感している。地の利を活かし、「ここに来れば1日あまりお金をかけずに遊べる・楽しめる」情報を共に検討したい。
- コロナ禍のなか、入館者数増に向けて様々な試みを実施されたことに敬意を表す。

(4) 運営関係

A. 2020(令和2)年度 弥生の丘展示館の臨時休館についての報告

B. 2021(令和3)年度 弥生の丘展示館の臨時休館案について

- 7月の休館日の変更賛成。
- こういう時なので臨時休館案は賛成。ウイルス禍の後の万全な再開を祈ります。
- 特に異議なし。